業事業所は，生産機能を失ってきている。その生産機能の喪失に伴い，新しい機能として入ってきたのが，研究・開発，企画，設計及び試作を行う機能であり，市内所在の大企業の事業所の多くは，機能転換を行っている。

これらの動きの背景には，工業制限３法（「工業等制限法」，「工場立地法」，「工業再配置促進法」）により川崎市に於ける工業の拡大が難しくなったこと，市全体の産業構造の転換を図る政策などが存在している。

川崎市は，重化学工業を中心とした大量生産を行う工業都市から，付加価値が高く，高度な技術を要する製品を開発し，設計する機能を行う頭脳都市への脱却を試みている。例えば，製造業における，研究，開発部門の誘致，市内中小企業へのハイテク化に対応できる技術の指導などを行っている。川崎市産業振興会館，神奈川サイエンスパーク，マイコンシティなどが代表的な企画である。

この製造業に於ける事業所の機能変化に併せて川崎市では，自立都市の形成にむけて，東京に近接しているという条件を生かして，東京のバックオフィスの吸収を行っている。そのために，市内各地域の商業拠点で再開発を進め，ビジネスゾーンの形成を行っている。例えば，川崎駅駅前の大日本電線跡地や明治製菓跡地，新川崎駅付近の新鶴見操車場跡地，及び，新百合丘駅付近には，高層のインテリジェントビルが建設され，ビジネス空間を創出している。また，この背景には，市域の形状や位置的な問題により単一の核を形成できない川崎市に於いて，複数の核を形成し，その核をネットワークで結ぶ分節連鎖型の都市を創り出そうとする市の思惑も存在している。

しかし，現在までに完成し既に事業を開始しているオフィスの活動内容を調べた所，多くのオフィスが，企業秘密に関わる研究・開発に関係の深い業務を行っており，個々のオフィスが閉鎖的な存在となっている。そのため，企業交流を中心とした核間のネットワーク化は難しく，単一の都市としての結合性という課題が残されると思われる。

以上のように，川崎市は，工業都市から新しいタイプの自立都市への転換に向けて，現在，活発に変化を見せており，今後の動向が，大変興味深い都市となっている。

# 広島湾島しょにおける農業生産の変化

## －江田島・能美島を例にして－

渡　邊　聖　子

江田島・能美島は，私が上京するまで毎日目にしていた島である。広島湾内の本土近接型離島，しかも昭和48年の早瀬大橋の架橋によって隣りの倉橋島を通じて本土と陸続きとなった，島としてはやや特殊な部類に属するこの島をフィールドに選んだ。それは，この「地域」が，島であるという隔絶性を持っていると同時に，DID都市広島の近郊に位置しているといった特異な条件を備えていることによる。島内の主産業である農業生産の変化を研究することによって，この江田島・能美島の地域構造を探ってみようというのが，本論文の研究の目的である。

江田島・能美島の農業は，江戸時代に木綿が盛んに生産されるなど，流通の要路に近いことを利用した商品作物の生産が古くから行なわれていた。しかし，明治21年，江田島に海軍兵学校が設置されてから，昭和20年第２次世界大戦終結までの間，この地域は軍の要塞地帯となり，測量，舟運などの規制が行なわれ，農業にも打撃を与えることになった。この間は，海軍兵学校関係のサービス業，及び，江田島から約30分で通勤できる呉海軍工廠への島外通勤が増加した時期でもある。

戦後の一時期，島の人口は，63560人と大きく膨れあがったが，その後昭和50年頃まで急速に減少し，昭和60年現在では，40317人となっている。戦後，農業生産についても大きな変化が見られた。まず，労働力の面から見てみると，広島湾地域（広島と呉）に立地している造船業を中心とした機械工業の発展とともに島に残っている男子労働者は次々と駆り出された。また，昭和39年のフェ

リー就航を契機とし，以降島外への通勤・通学が可能になったため，ますます島外への労働力の流出に拍車がかかった。その結果，農業は，老年の男子及び壮年の女子の仕事となった。昭和60年の農業就業人口を見ると，男子の8割，女子の5割を60歳以上が占めている。次に，農作物の面から見てみると，2度の大きな変化があった。最初の変化は食糧増産からみかん栽培への転換である。昭和30年代に入って，西日本を中心にみかん栽培ブームがおこると，この島でもみかんが農業生産物の中心となった。しかし，昭和47年にみかん価格が大暴落し，農業生産の中心は，みかんから野菜や花卉の栽培へと移った。これが2度目の変化である。ここで重要なのは，みかん景気の時期に，江田島・能美島では，広島県の中東部の島しょのようなモノカルチャー的なみかん栽培とならなかったことである。これは，広島という大市場に近く，市場への出荷も番船という流通組織により比較的容易であったためであると考えられる。このことが，みかん価格暴落後に野菜・花卉産地への転換が早く行なわれたことの大きな要因となっている。

江田島・能美島は，江田島町・能美町・沖美町・大柿町という行政区域に分かれている。この4町の中で農業生産が盛んなのは，能美町と江田島町で，能美町は花卉，江田島町は野菜の生産が盛んである。花卉の生産が中心となっている能美町の中でも，南側の2地区（中町・鹿川）が花卉生産を主としているのに対し，北側の高田地区は野菜生産が主である。このような隣接する2地区における農業生産物のはっきりした違いが何に起因するのかを考察したところ，地形，気候，土壌などの自然条件の違いだけでなく，高田地区の持つ保守性もかなり関係しているのではないかという結論に至った。また，その保守性は，高田地区の中でもどちらかと言えば山麓に立地する農業集落にあるようであった。

この地域の将来には，急速な高齢化や農業の衰退といった暗い話題が多い中で，1つだけ明るい話題がある。それは，広島市と江田島を結ぶ「広島湾架橋構想」で，これが実現すれば，人口減少の歯止めとなるだけでなく，この島の海洋レクリエーション基地としての新たなる発展も夢ではないのである。

# アーカンソー州における「住み分け」と生活基準に関する地域構造について

山吉章子

アーカンソー州は合衆国南部に位置する農業州である。ボーキサイトの生産高も高く，天然資源にも恵まれている。しかし，1人当りの平均年間所得はミシシッピ州を除くと合衆国最下位であり，教育水準も低い。南部の中でも経済的文化的後進地である。

南部の一員であるアーカンソー州は，合衆国平均よりも黒人比率が高く，16.3%である。しかし，黒人の分布は州全土に一様ではない。州の東部から南部にかけて黒人は集中的に分布している。その地域では黒人比率も高く，25%以上である。それに対し，州の北部から西部にかけて，黒人の分布は見られず，その地域での黒人比率は1%以下が大部分である。つまり，アーカンソー州において，黒人の「住み分け」が観察される。(1980年センサスより)

アーカンソー州に見られる「住み分け」の形成は，州の自然環境や合衆国南部の歴史によって大きく影響されながらなされた。

アーカンソー州は地形的に2つに分けられる。オザーク，ワチタ，ミシシッピ川流域からなる高地と，西部海岸平野，ミシシッピ沖積平野，クロウリー山脈からなる低地である。州の北西部の高地は大部分が森林に覆われ，1880年頃迄に落ち着いたアーカンソー州への移民のうち，高地に定着した者は，自給用の農業を営むだけであった。しかし，南東部の土地の肥沃な低地に定着した者は，黒人奴隷を使った大規模な綿花栽培を開始し，アーカンソー州も有数の綿花栽培地を有する奴隷州になった。こうして，奴隷であった黒人はアーカンソーの低地，州の南東部にだけ集中して存在することになり，それが現在の「住み分け」